

もくぞう あ み だ にょらいおよびりょうきょう じりゅうぞう
木造阿弥陀如来及 両脇侍立像

<概要>

員 数	3 軀
法 量	阿弥陀如来 像高130.1cm、観音菩薩 像高 84.6cm、勢至菩薩像 像高 83.6cm
時 代	鎌倉時代

愛知県岡崎市岩津町に所在する浄土宗西山深草派の圓福寺本堂に本尊として安置される阿弥陀如来及両脇侍立像である。左脇侍を観音菩薩、右脇侍を勢至菩薩とし、三尊ともに立像形式にあらず。本三尊像は、もとは西山派深草義の祖・円空立信（1211～84 年）が1251（建長 3）年に京都深草に建立した真宗院（のち寺号を「圓福寺」とする）の本尊像で、1883（明治 16）年、深草派信徒寺院の多い三河地方の妙心寺と寺地・寺号交換がなされ、本尊等を京都から移して現在地に祀ったものである。

本阿弥陀三尊像は、いずれもヒノキの寄木造りである。阿弥陀如来像は頭体のバランスがよい像で、着衣の裾などを波打たせて造形に動きがみられる。両脇侍像はやや痩身で腰の位置が高く、像高の割に長身にみえる。

中尊の阿弥陀如来像の印相^(※1)は、左右の手の第一・二指を捻じる通例の来迎印^(※2)とは異なり、左手において第一・三指を捻じ、第四指もわずかに捻じる点に特徴的がみられる。京都・真如堂（真正極楽寺）の本尊阿弥陀如来像（10 世紀末頃）の来迎印が左手の第一・三・四指を捻じるもので、それを模した像として、浄土宗西山派の祖・証空（1177～1247 年）が発願した京都・大念寺像（1243（寛元元）年）が知られている。本像を安置する圓福寺の開山・立信が証空の弟子であったことから、影響関係がうかがえる。

また、本三尊像はいずれも足柄とは別に、像底に丸孔をうがち、台座上の鉄製丸棒に挿し込んで立たせる点にも特徴がある。足裏に足柄を作らずに、台座上の丸棒のみで立たせる例は、鎌倉時代以降の複数の類例がある。それらは仏教の経典『観無量寿経』で説く、空中に現れた無量寿仏^(※3)を表しているとの見解があり、像の生身性^(※4)との関連が指摘されている。先の真正極楽寺像においても台座上に二本の棒が立ち、像の両足裏の孔に挿し込んで立たせている。本三尊像は足柄で立つにもかかわらず、丸棒を作り出したのは、真正極楽寺像や、鎌倉時代の類例にみる生身性が意識された可能性も考えられる。

このように、本像は西山派深草義の祖・立信が真宗院、のちの圓福寺に伝来した由緒ある阿弥陀三尊像であり、都風の洗練された作風がみられる。中尊像の台座や光背も造立時のものが現存し、像とともに造形的な水準はとても高い。真宗院が創建され、堂舎が整った建長・正元頃（1250 年代）の作であるとみられ、西山派の一寺院に受け継がれた像として重要であり、愛知県指定文化財として指定する。

- (※1) 印相 仏教において、手指で様々な形をつくり、宗教的理念を象徴的に表すもの。
- (※2) 来迎印 人の臨終に際して、阿弥陀如来が極楽浄土から迎えに来る様子（来迎）を表す印相。
- (※3) 無量寿仏 阿弥陀如来の別名。『観無量寿経』では、釈尊の祈りにより、空中に無量寿仏が現れた場面を記述している。
- (※4) 生身性 仏像を偶像としてではなく、現実性のある存在として表現し、信仰対象とすること。



木造阿弥陀如来及両脇侍立像

(高橋寛撮影)

もくぞうぜんどうだいし ざ ぞう
木造善導大師坐像

<概要>

員 数	1 軀 ^く
法 量	像高 ^{ぞうこう} 83.9cm
時 代	鎌倉時代

愛知県岡崎市岩津町^{いわづ}に所在する浄土宗西山深草派^{せいざんふかくさ えんぶくじ}の圓福寺^{えんふくじ}本堂の本尊・阿弥陀三尊像の後方左右の脇壇^{ほうねんしょうにん}に、法然上人^{ほうねんしょうにん}坐像と対で安置される善導大師坐像である。本像はもと西山派深草義の祖・円空立信^{えんくうりつしん}（1211～84 年）が 1251（建長 3）年に京都深草に建立した真宗院^{しんじゆいん}（のち寺号を「圓福寺」とする）に伝来した像で、1883（明治 16）年、深草派信徒寺院の多い三河地方の妙心寺^{みょうしんじ}と寺地・寺号交換^{じち・じごう}がなされ、本尊とともに京都から移して現在地に祀ったものである。

善導^{ぜんどう}（613～681 年）は、中国唐代初期に活躍した僧侶。中国浄土教の大成者として知られ、浄土五祖^(※1)の一人である。圓福寺に伝わる本像は、寄木造りの技法で製作された高僧像で、手に如意^(※2)（後補）を執って趺坐^{ふざ}する。現存する善導大師の作例はいずれも鎌倉時代以降のもので、図像としては立像と坐像の両様がある。前者は開口・合掌形で、後者は開口・合掌形、または閉口・持物形^{じもつ}にあらわされる。圓福寺像は後者（坐像）のうち閉口・持物形の像である。同様の作例としては、京都・二尊院^{にそんいん}の浄土五祖像（絵画、南宋時代・13 世紀）のうちの善導像（拈子を執る）などがあり、いずれも両手を膝上で伏せ、左手は全指を伸ばし、右手は全指を曲げて持物を握る形であることから、本像も本来は拈子を執る姿であったと思われる。

最古の善導大師像は奈良・来迎寺像^{らいこうじ}（鎌倉時代、1200 年頃）で、開口・合掌形の坐像である。善導大師像の多くが小柄で優しい顔貌であるのとは対照的に、来迎寺像は頬骨の張る顔で、肩幅もあり、がっしりとした体形などに特徴がみられる。圓福寺像も来迎寺像同様に、骨太でたくましい体形であり、根幹部を左右二材^は矧^ぎぎ^(※3)とする構造にも共通点がみられる。

このように、本像は奈良・来迎寺像に迫る 13 世紀初期頃の作とみられ、圓福寺が創建された建長年間より遡る像で、善導大師像としては最初期のものと位置付けられる。浄土宗の肖像彫刻を考える上で重要な作例であり、愛知県指定文化財として指定する。

(※1) 浄土五祖 中国浄土教を体系化したとされる、曇鸞、道綽、善導、懷感、少康の五人。

(※2) 如意 孫の手^{すのて}の形をし、先端をわらび形に巻き曲げた法具。

(※3) 二材矧 2つの材を貼り合わせて、1つの形とする技法。



木造善導大師坐像
(高橋寛撮影)